北海道サイクリングフェア2019 開催報告

dec研究員　中前千佳

今年2月15日（金）から3月17日（日）までの約1か月間、東京・南青山にある『ライフ・クリエーション・スペース OVE』および渋谷にある『サイクルカフェ TORQUE』において、パネル展示や北海道食材を使った特産品などをご紹介する『北海道サイクリングフェア2019』を開催しました！

『サイクルカフェTORQUE』での展示

『北海道フェア&サイクリング・フォー・チャリティ2019』のキックオフイベントを開催

北海道サイクリングフェアのスタートの日に合わせて『北海道フェア&サイクリング・フォー・チャリティ2019』のキックオフイベントを開催し、北海道でサイクル・ツーリズムを展開している、「さっぽろサイクルラボ」、「歴史・文化を活かした南北海道サイクルツーリズム推進協議会」、「きた北海道エコ・モビリティ」の3つの活動団体の取り組みについてプレゼンテーションを行い、北海道のサイクル・ツーリズムの魅力をPRしました。

北海道の食材を使ったOVEカフェ特別メニュー

「さっぽろサイクルラボ」からは、札幌市と近郊で展開している、札幌の歴史的な建造物をめぐるツアーや恵庭の美しい庭を作っているお宅をめぐるオープンガーデンツアー、石狩の歴史と文化をめぐるツアーなど、個性あふれるツアーを紹介しました。「歴史・文化を活かした南北海道サイクルツーリズム推進協議会」からは、歴史・文化をはじめとする南北海道の魅力を体験できるサイクルツアーの紹介、「きた北海道エコ・モビリティ」からは、「夏の北海道、自転車で旭川から宗谷岬を目指す旅 "TEPPEN-RIDE"」の紹介を行いました。

『ライフ・クリエーション・スペース OVE』での展示

当日は、関東圏にお住まいで北海道でのサイクリングに興味のある方40名が来場し、北海道からPRに訪れた10名のメンバーと一緒に、北海道の食材を使ったOVEカフェ特別メニューや北海道ワインを味わいながら、東京と北海道で交流しました。

来場された方はいずれの方も北海道の美しい景観や雄大な自然に興味・関心を持っており、今年の夏はぜひ北海道でサイクリングをしたいという声を多く聞きました。これからもより多くの方にサイクリングを目的に北海道へ訪れてもらうため、北海道のサイクル・ツーリズムの魅力を情報発信していきます！

OVEカフェフードセラピスト
石光映美子氏によるフードメニュー

- ひまわり畑ポーク・雪の下人参
- ひまわり畑ポーク缶つま
- チーズ工房が作るナチュラルヨーグルト・ハスカップジャム
- なよろ天牛ハンバーグ
- なよろ煮込みジンギスカン
- もっちりいかめし
- 北海道サイクリングフェアパスタ
- 雪の下じゃがいも・くん製卵
- Topenpeトマトジュース、ひまわり油、ダルス塩
- 3種類ソーセージのダブル行者ニンニク、チーズ&チーズ、ハスカップ、雪の下じゃがいも

編集後記

上半期が終わりますね。。。夏至を過ぎたらもうあとは。。。って先のことなんて考えたくないですね（笑）。でも年度は始まったばかりです。さて、シーニックバイウェイ支援センターが発行する「北海道のよりみちドライブ情報 Scenic Byway vol.23」が、発行に向けて作業も大詰めとなっております。今号のテーマは「ドライブ&美」。様々な視点から見る美は新鮮な驚きと発見があります。「北海道のよりみちドライブ情報 Scenic Byway vol.23」は7月中旬発行です。お楽しみに！（RW）

dec monthly vol.405
2019年6月1日発行　発行人 編集人 山口 登美男
発行所 一般社団法人 北海道開発技術センター　〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17
TEL(011)738-3363 FAX(011)738-1889 URL http://www.decnet.or.jp/ E-mail dec_info01@decnet.or.jp

News letter since 1985 01 JUN
Hokkaido Development Engineering Center
dec monthly
2019.6.1 vol.405 デックマンスリー

● Monthly Topic（マンスリートピック）
令和元年度 dec総会 開催報告
● dec Report（デックリポート）
ニセコ、札幌フットパスセミナー フットパスによる地域活性化の展開
―英国WaWの理念、効果、可能性―

dec Interview >>> 有限会社 山﨑ワイナリー 栽培責任者・空知シーニックバイウェイ-体感未来道-副代表　**山﨑　太地 氏**

三笠市達布の気候風土を100パーセント表したのが私たちのワイン。もっと地元の人に飲んでもらうために、ワインを学ぶ場をつくり、空知全体に広げていきたい。

ワインの世界で「ドメーヌ」と言えば、ブドウ栽培から醸造、熟成、瓶詰めまで一貫して独自に行うワイン生産者のこと。穀物農家からドメーヌへと転身し、空知産ワインの展開をリードしてきたのが山﨑ワイナリーです。ワイン生産の傍ら、地域づくりリーダーとしても活躍する山﨑太地氏をワイナリーにお訪ねしました。

父・和幸氏がブドウ栽培に着手したのは1998年。4年後、ワイナリー事業を設立されました。農家が醸造免許を得て始めたワイナリーでは全国初とか。そのころの太地さんはー。

初めてブドウの苗を植えたときに、畑で手伝ったことはよく覚えています。中学一年のゴールデンウィークで、ラジオからは行楽地に向かう車の渋滞情報が流れ、畑から見える道央道も渋滞気味。世の行楽気分をよそに、ひたすら苗を植え続けた、という強烈な思い出です。やがて父は困難と言われていたピノ・ノワールの栽培に成功し、2003年に初リリースを達成。メディアにも注目されて、ワイナリー事業がスタートしました。

私にとってはちょうど中高生の多感な時期に身近な環境が大きく変わったのですが、それによって経験豊かで意識の高い大人たちとたくさん出会えたことはよかったですね。研修生としてワインづくりを学びに来ていた人やワイナリー建設に携わる人、行政関係者など多様な価値観を持つ大人と身近に話をすることで、ずいぶん鍛えられました。気がつけば「父ちゃん」と呼べるような指南役が自分には20人もいる、という感じでした（笑）。

スーツ姿の職業への憧れもあって教員になろうと思い、北海道教育大岩見沢校に進学しましたが、たくさんの父ちゃんたちの薫陶を受けた身としては同級生と話が合わず、浮いた存在だったと思います（笑）。高校の美術教員の免許を取り、一般企業の就活もして進路にはさまざまな選択肢がありましたが、結局、自分にとって最も可能性を感じた山﨑ワイナリーを選びました。

その後、御社はブドウ栽培を拡大し、2014年、名実ともにワイン専業メーカーになりました。ワイン生産の魅力は何でしょうか。

私が山﨑ワイナリーに入社した2009年当時は、従来の農家としての作目である米や小麦を作っていて、ワイナリー事業は売上げの3割程度。穀物生産の利益でワイナリー事業に投じた資金を返済する状況でした。米や小麦の生産は、主食を作っているという自負を感じる一方で、出荷してしまうと食卓に届いているという実感が僕には得られなかった。それに比べれば、ワインは自分たちでゼロから作ったものを直販でき、直接、賞賛も批判も伝わってきます。やりがいや闘争心がどんどん湧いてきました。

ただし、米や小麦は最低価格が保証され、共済制度で経営が守られますが、ブドウにはそれがなく、一度、穀物関連の

dec Interview

やまざき　たいち
1985年三笠市生まれ。岩見沢東高校から北海道教育大学岩見沢校へ進学（高校美術教員免許など取得）。卒業後、父・山﨑和幸氏が経営する有限会社山﨑ワイナリー（三笠市達布）に入社。現在、栽培を担当するとともにワイナリー経営全般の実務に携わる。市立三笠高校・学校評議員、空知シーニックバイウェイ副代表。岩見沢市内の自宅から自転車通勤を励行。

生産設備を捨てると復活も難しい。ですから私が「ブドウだけにしたい」と告げたとき、両親は大変心配しました。しかし、私からすると8月は小麦、10月は米という収穫繁忙期がブドウの作業と重なるのは辛い。新興のワイナリーも増えてきたなかで、もっとブドウに打ち込みたい、打ち込めばワインはもっとおいしくなる、という気持ちでした。ワインの評価が自分の評価だと思い、一気にブドウへと切り替えていったのです。

現在の体制は、役員の両親のもと社員は4名。兄が醸造、姉がショップ販売（週末のみ営業）を主担し、私は栽培と全体の舵取り役で、他に社員1名を雇用しています。年間生産数は4万本。内3万5千本を出荷し、9割が直販です。これまで行政から様々な支援・補助をいただいてきましたので、それを法人税という形で返し、雇用も図りながら生産拡大していければと考えています。

空知地方ではワイナリーやヴィンヤード（醸造用ブドウの生産農場）が増え、ワイン産地としての認知度も高まっています。地域への思いについて教えてください。

ワインの優れた点は、世界で唯一、加水されていないお酒であること。原料はブドウだけで、当社のワインであれば、その水分は三笠に降った雨や雪解け水だけです。さらに私たちの誇りは原料のブドウに自社畑以外のブドウを一切、使わないということで、そうした「完全ドメーヌ」は北海道では数件程度、国内全体でもわずかでしょう。農家としてワイナリーに取り組んできたので、それが可能となりました。今後さらに、ブドウやワイン造りに取り組む方が増え、産地が形成されていけばと考えています。そのためにも、気象や土壌、栽培・醸造技術など多くのことを積み上げ、共有していく必要があります。

私たちのワイナリーでは、飲めば達布の丘の風景が浮かび、風が感じられるような、この気候風土を100パーセント表したワインづくりをしているつもりです。土地に根付いた農作業や加工によって生まれるのがワインであり、「ここでつくって、ここで売る」のが理想。飲みたいと思ったら、ぜひ空知に来ていただきたい。空知は札幌と旭川の間にあり、どちらからもそう遠くはない。ワイン産地として、この都市からの距離感はとてもいいと思っています。

地域とのつながりで心がけているのは「稼いだ外貨」を地元に回すこと。当社は三笠市内では数少ない域外収入の多い企業ですが、なるべく身近なところでお金を使うように心がけています。海外から輸入した設備の修理も東京から専門技術者を呼ぶのでなく、地元の設備屋さんに悩みながらやってもらう。最初は大変ですが、続けているとうまく回るようになりました。同様に段ボール、ラベルなどワイン生産に関連するものの地元調達を進めれば、ワインを軸にした地場産業が育っていく。そういう地域を絡めたワイン産業をつくることを目指したいですね。

昨年、「空知シーニックバイウェイ-体感未来道-」が候補ルートとしてデビューしました。太地さんは副代表の一人で、広域の地域づくりの取り組みにも意欲的ですね。

空知シーニックバイウェイは10年前に取り組みが始まりましたが、私が本格的にかかわったのは2016年の「地域創生フォーラム」にパネリストとして参加したのが最初です。空知という広いエリアで、民間と行政が同じ方向を向いて地域づくりに取り組むことに大いに共感しています。私より少し年上の、各地の地域リーダーたちと交流できることも刺激的で、空知の良さを私自身もっと経験して、それを伝え、広げていきたいですね。

私が空知シーニックバイウェイのなかで実現できたらと思うのは「ブドウとワインを学ぶ場」を用意することです。「地元の人にこそ、もっとワインを知ってほしい」と常々思い、すでに小学校の地域学習の授業の受け入れなどを行ってきましたが、今夏はさらに三笠市の方々を対象とした講座的なイベントを計画しています。（一社）日本ソムリエ協会の「ワイン検定」の実施や、ブドウやワインの魅力を伝え、ワインはもちろん、達布地域をより身近に感じて楽しんでもらえるように企画していきたいです。ワインは空知シーニックバイウェイの魅力の一つになれると考えているので、今後このようなワインを学ぶ場を空知というフィールドでも展開していけたらと思っています。

もう一つ、シーニックバイウェイ北海道で提案しているのは「空知ノ物語」という企画です。民俗学者・柳田国男の『遠野物語』に触発された名称ですが、空知の歴史、文化、伝承など各地に眠っている物語を広く呼びかけて集め、共有しようという試みです。今は空知を離れている人の思い出話や地域に根ざした逸話、怪談なども含め、誰でも自由に投稿してもらえるしくみにしたい。冊子にまとめて発信したり、最終的には社会科の副読本になるようなものができればいいと思っています。

教育大に学んだキャリアも生かしながら、ますます幅広く活躍されそうですね。

毎日こつこつ積み上げる農作業は、実はあまり向いていないと思っています。むしろ、アイデアや発想勝負で明るく事を進めるのが本当の自分（笑）。それを鍛え直して、どこまでも粘り強く対応する力を与えてくれたのが農業でしょうね。

4月になると雪の下にあったブドウを起こして作業が始まり、収穫は10月から。冬に向けた剪定と木を寝かす作業が終わるのは11月末。12月に入れば決算書の準備など事務仕事に追われ、1月に入ると、学校や自治体、経済団体などの催しの講師で忙しくなります。そういうなかで道外にも出かけてたくさんの方々と出会い、言葉を交わす機会をとても大事にしています。それによって自分が何者であるか、自分の位置が見えるような気がするのです。そして春になれば打って変わって、無言のブドウと向き合う日々が始まり、それが半年続く。こんな年月を10年重ねてきたわけですが、我ながら成長したな、と（笑）。これからも接する人から「元気が出る」と言われるような30代を過ごしていきたいと思っています。

写真上：今年、新たに植えたブドウの様子を確認しているところ

写真下：ブドウ畑から丘の上のワイナリーを望む

令和元年度 dec定時総会

令和元年度dec定時総会が5月31日、京王プラザ札幌において開催され、予定の5議案が滞りなく承認されました。平成30年度の事業報告を中心にお伝えいたします。

理事長挨拶　山口 登美男

外国人観光客増加が好調な我が国ですが、decでは北海道への世界大会招請の動きがある「アドベンチャートラベル」をはじめ、「スイス・モビリティ」や「フットパス」など観光関連の新たな取り組みについて調査研究や交流活動を進めております。今年度は寒地技術シンポジウムが第35回を迎えますが、引き続き北海道の課題に取り組み、地域の強みや資源を有効に活用する活動をサポートしてまいります。

会員数（2019年3月31日現在）　法人会員：225社　個人会員：65名

新任役員　● 理事：平島 信一氏　＊今 憲昭氏は理事を退任されました。

自主研究

※令和元年度（第36回）定時総会資料より抜粋

観光、公共交通、寒地技術、野生動物、環境教育など多様化するニーズに応えて

モビリティ・マネジメントに関する調査研究

「第13回 日本モビリティ・マネジメント会議」、土木学会主催「第57回 土木計画学研究発表会・春大会」にて、研究成果を発表するとともに他地域事例の収集を行った。

沿道の環境保全、活用に関する調査研究

シーニックバイウェイ北海道の地域住民や団体が行う活動への参加、事務局及び活動作業の支援、社会的価値評価手法の研究等を行った。NPO法人日本風景街道コミュニティの事務局及び運営支援を行った。

公共交通に関する調査研究

「くらしの足をみんなで考える全国フォーラム2018」に参加・発表するとともに、他地域事例の収集を行った。

北海道エコ・モビリティに関する調査研究

人力での移動を主としたモビリティと観光に関する調査・研究を目的として、「北海道エコ・モビリティ研究会」を開催した。「さっぽろサイクルラボ」と連携し、都市型、郊外型サイクルツーリズムの課題を把握した。また、日本サイクルツーリズム推進協会によるガイド養成講座を実施し、自転車ガイド育成を実施した。

福祉交通やバリアフリーツーリズムに関する調査研究

（一社）日本福祉のまちづくり学会北海道支部の活動支援及び、「北海道の交通を考える連続セミナー」を開催した。

「ふゆトピア都市」に関する調査研究

ウインターライフ推進協議会に参加し、つるつる路面の観測及びホームページでの情報提供等の活動を行った。「ボランティア活動による広域交流イノベーション推進研究会」事務局として除雪ボランティア事業の企画・運営を行った。

吹雪時の視認性に関する調査研究

画像解析技術を用い、道路管理者等に道路カメラ画像を活用した視界状況の提供を試行した。さらに、走行車両で撮影した動画からドライバーの視認性を連続的に評価する手法について、北海道大学と共同で研究を行った。

積雪寒冷地における道路緑化に関する調査研究

北海道の道路緑化に関する各種資料の収集・整理、勉強会及び現地調査を継続し、その研究成果を2018年度雪氷学会北海道支部研究発表会等で発表した。

エコ・コリドールに関する調査研究

道路生態研究会の総会・第6回研究発表会への参加及び研究発表等を通し、情報交換や人的ネットワーク構築に取り組んだ。また、第24回「野生生物と社会」学会九州大会に参加した。

TEPPENライド宗谷岬のゴール

雪はねボランティア

インフラエコネットワークに関する欧州会議（IENE2018）プレナリーセッションの様子

自主研究つづき

エゾシカの被害対策検討に向けた調査研究

エゾシカ問題に係る関係機関と協議及び情報交換を行った。また、鉄道総合研究所とエゾシカの列車事故対策に関する共同研究を引き続き実施した。名寄市北国博物館での特別展「エゾシカ」への展示協力を実施し、その結果を日本哺乳類学会2018年度大会にて発表した。

土木史に関する調査研究

北海道の土木史や道路史に関わる調査等を実施し、「第38回土木学会土木史研究発表会」、「第73回土木学会年次学術講演会」等で発表した。また、「北海道のみちの歴史研究会」に参加し、運営を支援した。

環境、エネルギーと社会資本整備に関する調査研究

「北海道EV・PHV普及促進検討研究会」の事務局として同研究会のホームページを運営し、EV・PHV関連情報の集約及び情報発信を行った。また、北海道バイオディーゼル研究会の事務局として運営、支援を行った。

北海道の「地域ブランド力」を活かしたビジネスモデルの開発に関する調査研究

「ニセコ羊蹄山麓体験型ツーリズム推進協議会」の事務局として、農家・NPO法人等と連携して地域特産品である野菜の商品開発・販売支援を行った。さらに「道北の地域振興を考える研究会」に参加し、意見交換を行った。

気候変動下における雪氷環境に関する調査研究

道東地域において、防雪柵及び防雪林周辺の吹きだまりや視程障害に関する現地調査を実施。防雪柵の調査では、雪氷研究者等との共同でインターバルカメラと気象計器による連続観測等を行った。

北海道の地域防災に関する調査研究

「ほっかいどう防災教育協働ネットワーク」へ参加し、地域防災力向上方策等について検討。H30年北海道胆振東部地震で被災したdec職員を対象にアンケート調査を実施し、防災検証・研究を行った。

北海道新幹線開業による2次交通及び周遊観光に関する調査研究

北海道新幹線の経済効果を全道に広く波及させるため、北海道新幹線とレンタカーを組み合わせた北海道観光の可能性や二次交通のあり方などについて調査研究を行った。

学校教育との連携による社会的ジレンマ問題の解消に関する調査研究

(株)アドバコムとの共催により、こども環境情報誌エコチルにおいて、「みんなで考える公共交通アイデアコンテスト」を実施。また、土木と学校教育フォーラムに参加し、情報収集を実施した。

北海道の歴史・文化を活用したヘリテージツーリズム関する調査研究

アイヌ文化についての勉強会、アイヌ語地名勉強会を開催し、内容をまとめた記事を「開発こうほう」に掲載。また、世界的なネーチャーツーリズム団体ATTAの会員用広報サイトでアイヌ文化についての記事を掲載した。

※令和元年度（第36回）定時総会資料より抜粋

自主プロジェクト

寒地開発技術に関する情報・資料の収集整理

雪氷研究大会2018・札幌(胆振東部地震のため誌上開催)、第34回寒地技術シンポジウム、日中冬期道路交通ワークショップ、第98回TRB年次総会等に参加し、技術情報を収集した。

技術資料等のデータベース化に関する調査研究

最新の社会資本整備技術資料や、同技術情報を収集・整理し、データベース化、ホームページ上での公開などに関する調査を行った。

「寒地開発技術委員会」の設置

「寒地開発技術委員会」を継続して設置し、積雪寒冷地の道路設計に係る検討を行った。また、「道路設計幹事会」を開催して調査研究の方針を検討するとともに、積雪寒冷地の道路設計に係る課題と対応について、調査検討を行った。

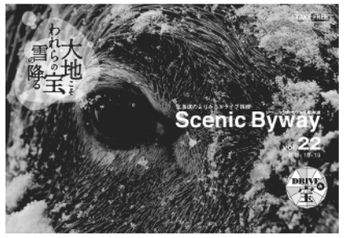
インターンシップ制度

北大工学部環境社会工学科資源循環システムコース修士1年の学生を受け入れた。

沿道の環境を守り、活用する団体への支援事業

「沿道の環境を守り、活用する事業に関する共同研究事業」について審査委員会を開催し、平成30年度の事業採択及び平成29年度の事業報告と優秀事例の選考を行った。シーニック賞受賞団体を対象に、「日本風景街道大学しずおか校」への派遣研修事業を実施した。

土木遺産ツアーの様子



情報誌 ScenicByway vol.22(右)

◆開発事業等に関する調査研究の受託・・・計99件　◆学会・協会等への会員としての参加…計18件

調査研究成果などの紹介及び普及

- ニューズレター(dec monthly)の発行12回
- ホームページの更新(http://www.decnet.or.jp/)
- 学会・シンポジウム等での研究発表等

第34回 寒地技術シンポジウム
特別講演 北室かず子氏

観光とモビリティに関する国際セミナー

出版刊行図書

- 「第34回 寒地技術シンポジウム論文・報告集」(概要集等を会員・関係者に配布〈頒布〉)
- 「第18回『野生生物と交通』研究発表会講演論文集」の編集

デックマンスリー

国際交流

- 国際冬期道路会議(PIARC)冬期道路委員会との技術交流
- 米国シーニックバイウェイ関係機関との交流
- ISCORD(寒地開発に関する国際シンポジウム)2019 フィンランド・オウル大会への準備
- 第17回 日中冬期道路交通ワークショップ(札幌市)開催

第18回「野生生物と交通」研究発表会

シンポジウム、セミナーの開催

- 第34回 寒地技術シンポジウム(開催地:札幌市)
- 第18回「野生生物と交通」研究発表会(開催地:札幌市)
- 地域政策研究セミナー等の開催(3件開催)

令和元年度 事業計画

本年度、decが取り組む事業について、2019年5月16日開催の理事会で承認された事業計画に基づき、ご紹介いたします。

調査研究事業［自主研究］

◆モビリティ・マネジメントに関する調査研究(継続)
◆沿道の環境保全、活用に関する調査研究(継続)
◆公共交通に関する調査研究(継続)
◆北海道エコ・モビリティに関する調査研究(継続)
◆福祉交通やバリアフリーツーリズムに関する調査研究(継続)
◆「ふゆトピア都市」に関する調査研究(継続)
◆吹雪時の視認性に関する調査研究(継続)
◆積雪寒冷地における道路緑化に関する調査研究(継続)
◆エコ・コリドールに関する調査研究(継続)
◆エゾシカの被害対策検討に向けた調査研究(継続)
◆土木史に関する調査研究(継続)
◆環境、エネルギーと社会資本整備に関する調査研究(継続)
◆北海道の「地域ブランド力」を活かしたビジネスモデルの開発に関する調査研究(継続)
◆気候変動下における雪氷環境に関する調査研究(継続)
◆北海道の地域防災に関する調査研究(継続)
◆北海道新幹線開業による2次交通及び周遊観光に関する調査研究(継続)
◆学校教育との連携による社会的ジレンマ問題の解消に関する調査研究(継続)
◆北海道の歴史・文化を活用したヘリテージツーリズム等に関する調査研究(継続)

［自主プロジェクト］

◆寒地開発技術に関する情報・資料の収集整理(継続)
◆技術資料等のデータベース化に関する調査研究(継続)
◆「寒地開発技術委員会」の設置(継続)
◆インターンシップ制度(継続)
◆沿道の環境を守り、活用する団体への支援事業(継続)

調査研究成果等の紹介および普及

◆ニューズレター(dec monthly)の発行12回
◆ホームページの更新　http://www.decnet.or.jp/
◆調査研究資料等の発行(随時)
◆学会・シンポジウム等での研究発表等

出版刊行図書

◆「寒地技術論文・報告集vol.35」(「第35回 寒地技術シンポジウム」資料、会員・関係者に販売)
◆「第19回『野生生物と交通』研究発表会講演論文集」の編集

シンポジウム、セミナーの開催

◆第35回 寒地技術シンポジウム(開催地:札幌市)
◆第19回「野生生物と交通」研究発表会(開催地:札幌市)
◆地域政策研究セミナー等の開催(年4回程度)

国際交流

◆国際冬期道路会議(PIARC)冬期道路委員会との技術交流
◆米国シーニックバイウェイ関係機関との交流
◆ISCORD2019 フィンランド・オウル大会の論文発表と理事会参加、事務局支援
◆第18回日中冬期道路交通ワークショップ(中国遼寧省)への参加

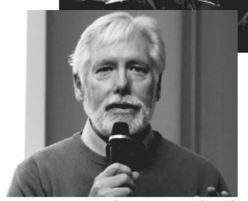
ニセコ、札幌フットパスセミナー

フットパスによる地域活性化の展開
―英国WaWの理念、効果、可能性―

1990年代以降、道内でも広がりを見せてきたフットパス（footpath：歩く人のための道）の活動。その発祥地である英国では、24万㎞に及ぶフットパス網を背景に新たな地域づくり活動WaWが成果を上げています。訪日中のWaW UKネットワークのサム・フィリップス氏とランダル・メッツガー氏を迎えたセミナーから、その取り組みをご紹介します。

［2018年11月8日・北海道大学総合博物館／主催：dec、共催：フットパス・ネットワーク北海道、（一社）シーニックバイウェイ支援センター］

セミナーの様子



ランダル・メッツガー氏

サム・フィリップス氏

WaWはいつ、どこで始まったか？

フィリップス氏　WaWは2006年末、英国北部の小さな町「ヘブデンブリッジ」で始まりました。地域経済の衰退を心配した5、6人のフットパス愛好者が歩く人を迎え入れることで少しでも地域活性化に貢献できないかと考えたのです。

独自性のある活動にするために定めたのが6つの活動基準で、①役場など行政を含む地域全体の賛同の気運を得る、②議会の承認を得る、③公共交通機関の利用を推奨、④フットパスの整備・維持に努める、⑤宿泊、飲食施設などを含む活動の宣伝方法を確立、⑥長期間の活動を可能にするしくみを持つ、です。以来、この6基準がWaWタウンの条件となり、07年にはヘブデンブリッジを含む4つのまちによって初の全国大会が開催され、全国運営委員会が設置されました。11年目となる現在、107のまちが加盟する大きな組織に成長しました。WaWに加盟すると、そのまちの名物やシンボルを描いた手作りの壁掛けをつくることになっています。わがまちのをご覧にいれましょう（↓写真参照）。

どのように運営しているのか

フィリップス氏　WaWの組織は全国運営委員会と加盟するまちの2層構造です。ただし、最近は加盟数が増えたので、全国を8つに分けたリージョン（地方）の単位の会合を行うなど試験的な運営を一部で行っています。年次総会を実施するほか、毎年10月に回り持ちで全国大会を開催します。ホストのまちは全国に宣伝する機会を得て、各地からの参加者の宿泊や飲食で地域が潤います。

WaWタウンは小さなまちが多く、全国組織に属することでいろいろな利点があります。まちが加盟を希望すると全国運営委員会がメンター（指南役）を派遣し、認定のプロセスや認定後の活動を指導、支援します。メンターは全国に20人。はっきりした資格はありませんが、WaWタウンの活動経験者などから全国運営委員会が依頼します。全国組織としてHPを開設し、月刊ニューズレターを発行するなど情報発信には力を入れています。WaWは収益が出れば活動に再投資する非営利団体ですが、この活動が発足後10年で英国全体にもたらした経済効果は控えめに計算しても420万ポンド（約6億円）に上ります。

WaWについて

WaWはWalkers are Welcome（歩く人を歓迎します）の略。2006年にブリテン島中部の小さなまち「ヘブデンブリッジ（Hebden Bridge）」のフットパス愛好者が地域活性化を目的に取り組み始め、その後、英国全土に広がって加盟地は107に（2018年11月現在）。全国運営委員会であるWaW UKネットワークのHPで最新動向やWaWタウンの活動内容を知ることができます。https://walkersarewelcome.org.uk

WaWタウン10年の成果は

メッツガー氏　2016年にWaWが10周年を迎えた際、私は活動の達成度を評価しようと全国調査を提案し、実施されました。その結果、前述の経済効果の他に、全国に約1200、合計1万460㎞の新しいフットパスが整備され、車イスや認知症の人のための道などを含め22種類の散策が編み出されたことがわかりました。全国のWaWタウン対象のアンケートの回答率は75％でしたが、回答したまちの75％のまちがHPで活動を発信し、65％は「バスウォーク」など公共交通機関を活用したフットパスに取り組んでいました。ウォーキング・フェスティバルを開催しているまちは43％で、開催日数の合計は延べ115日。合計500本のフットパスを参加者約9,000人が歩いており、WaWのステッカーを貼っている商店は1,000店以上に及んでいます。

わがまちの場合は

メッツガー氏　私の住むオトリー（Otley）はロンドンから約300㎞北にある人口1万6千人の歴史あるまちで、2008年に11番目のWaWタウンになりました。もともと歩く活動は盛んでしたが、加盟後、まちのフットパスのガイド冊子を作成、販売し、2本の長距離フットパスも整備。その資金はガイド冊子の売上げを充てています。WaWタウンになったおかげで、わがまちが歩く人のメッカであることを全国発信でき、地域では郷土の知識を共有しやすくなったり、環境保全意識も高まったと思います。

フィリップス氏　私のまちロス・オン・ワイ（Ross-on-Wye）は英国中西部にあり、人口1万人。2009年にWaWタウンの認定を受け、活動を発信するために5種類のパンフレットと3つの掲示板をつくりました。資金は商店や企業を回って集めましたが、予想以上に協力的な事業所が多く、協力店にはサポーターを示す特製ステッカーを配っています。年1度のウォーキング・フェスティバルでは、名物のリンゴ酒の利き酒など地元ならではの楽しみ方を満喫してもらっています。こうした活動でまちには10年で14万ポンド（約2千万円）の利益がもたらされたと試算しています。

会場の質問に答えて

和やかなセミナーの終盤で質疑応答が行われました。概略は次の通り。

〈Q1〉ウォーキング・フェスティバルの参加者数は：小さなまちで1日100人ほど。大きいまちで1,200人ぐらい。

〈Q2〉WaWタウンの認定の仕方は：申請を希望するとメンターが派遣され、まちを支援して申請書を作成し、全国運営委員会に上げる。そこで検討した上、多数決で決定。認定後もメンターが取り組み状況を3段階で評価して全国運営委員会に報告します。

〈Q3〉活動の経済効果の算出の仕方は：全国調査からビジターは1泊滞在で1人85ポンド程度という消費額が出ている。これを参考に70ポンドと低めに見積もり統計的に算出。

〈Q4〉WaWタウン活動の持続性における評価方法は：年次報告書で活動内容や達成度、次の目標などを確認し、しっかりした内容であれば大丈夫。はっきりしない部分があれば調査します。〈Q5〉活動の担い手の高齢化について対策は：WaWタウンすべてが抱える課題で簡単な解決策はない。宮城県の催しで、地域の人が学生と一緒に地域活性化に取り組んでいる話を聞きました。学生を巻き込むことも一つの方法だと思います。

文責：dec